近現代における大森銀山の景観の変遷

Landscape Changes of Omori Ginzan in the Modern Era

大給 友樹
OTABI Yuki

１．研究の背景と目的

石見銀山の大森町は陣屋町として発展し、武士、商人、職人が混在して暮らしていた。石州瓦をもつ町家や、銀の輸送に関わった伝統的景観をよくあらわしているとして、昭和 62 年（1987）に大田市大森銀山重要伝統的建造物群保存地区（以下「重伝建地区」）に選定された。大田市によると、地区の建物数は合計で 607 棟あり、そのうち町家、武家屋敷、土蔵等の 236 棟が「伝統的建造物」に特定されている。既往研究によると、近世には、寛政 12 年(1800)に「寛政の大火」でまちの 3 分の 2 が焼失し、その後、建物の形式が大きく変化したと言われている [1)]。近代以降に銀山は衰退し、昭和 18 年(1943)の大水害の後に閉山した。過疎のために大きな開発がなく、多様な様式、時代の建造物が残存し、重伝建地区に選定された。本研究では、既往研究を踏まえて、これまで明らかにされていなかった近代以降、特に「重伝建地区」選定後の景観と建物の変遷に着目する。①近代から昭和初期にかけての大森町の景観を把握すること、②重伝建地区選定後の変化を明らかにすること、③建造物の現状と修理の主体について明らかにすること、④以上の結果から町並みの変遷とその主体について考察することを研究の目的とする。

研究方法は資料調査、建物悉皆調査、聞き取り調査である。

２．景観の変遷

（１）近世

現在の大森町は「下佐摩」「宮の前」「昭和区」「新町」「駒の足」「羅漢町」「上佐摩下」「銀山」の８自治区からなっているが、近世には「銀山区域」と「大森区域」に分けられていた。「銀山」は山内を柵で取り囲み、銀生産と消費に限定された土地として利用され、鉱山労働者と家族、商いをするものが居住していた。「大森」は銀生産を行政と経済の両面で支える支援体制を備え、鉱山町よりも宿場町に近い景観を持っていた。17 世紀後半、銀産出量が減少すると山内よりも大森を中心とする山外へ拠点が移動し、「銀山」は「大森」の附属的存在として主従が逆転した 2)。

寛政 7 年(1795)から文化 1 年(1804)までの出来事を記した古文書『諸用録』3)によると、建物の密集した大森町は寛政 9 年(1797)に火災で 92 軒を焼失し、寛政 12 年(1800)にも通称「寛政の大火」と呼ばれる火災があった。これ以後大森の町並みで家を建築する場合、屋根は瓦葺きまたは板葺とし、燃えやすい茅葺は禁止されたという。寛政の大火は駒の足から出火し、代官所付近までの町並みを焼失したとされており 75%の建物が失われたことがわかる(表１)。

表 1　寛政の大火による被害状況

	類焼	残存	総数	焼失割合
武家	61	8	69	88%
寺院	5	8	13	38%
社家	4	0	4	100%
町家	219	80	299	73%
合計	289	96	385	75%

（２）明治期から昭和初期

明治期には藤田組による近代的な鉱山経営が始まった [4)]。その後、鉱石の産出量が減少し大正 12 年（1923）に休山した。大正 13 年(1924)に発行された『大森町案内』[5)]巻末に記載された協賛欄の店名、代表者、業種を一覧表に纏めた（表２）。これを見ると置屋や弁護士事務所から生活雑貨店まで、多様な業種があったことがわかる。人口は 2138 人で、現在の 5 倍の住民が暮らしていたことがわかる。また、商業従事者の割合が最も多く、町の活気があったことがうかがえる。

昭和 18 年(1943)には大きな水害があった（図１）。当時の新聞記事には「大森銀山を中心とする山崩れによるもので、水流は大森町から久利村、邇摩町から更に湯里町へと氾濫した」と記されている。大森

町住民の A 氏も「大水害で家が流されて、町並みがだいぶ変わってしまった。家が流されて今も空き地の場所があり、風呂屋も流されてそのまま無くなってしまった。水量も道路に１ｍくらい上がっていた。」とのことである。

聞き取りによると、水害後の町でも多様な業種の店があり、大森座などの芝居小屋もあったという[6)]。

表 2 『大森町案内』協賛欄一覧表

No.	店名	代表者	業種
1	朝日館	酒井　高美	旅館
2	不明	森山　喜六	弁護士
3	不明	松本　常作	牛肉卸問屋
4	松原酢店	不明	清酢醸造元
5	大森検番	不明	置屋（小田、胡谷、有馬、竹内）
6	常盤館	不明	料理
7	岸本呉服店	不明	呉服
8	竹美世	不明	酒醸造元（銘酒櫻川）
9	かん場商店	不明	化粧品、メリヤス（ニット）雑貨
10	イナモチヤ	森山　政市	油蝋燭製造所
11	不明	福井　漢山	羅漢焼の窯元・販売
12	高橋旅館	不明	旅館
13	不明	小原　小市	食料雑貨
14	不明	梅原　英雄	金物
15	不明	小浪　林吉	瓦の製造・販売
16	石見銀山薬湯	林　甚市	温泉
17	杞柳細工々場	森山　仁三郎	鞄
18	中島活影軒	不明	写真
19	長尾商店	不明	雑貨商（学用品）
20	不明	吉藤　慶太郎	金物
21	不明	松田　勇吉	食料雑貨
22	岸本モスリン商店	不明	綿織物
23	玉留屋商店	渡加　繁治	日用品
24	有馬光栄堂	不明	製菓、玩具
25	木村商店	不明	雑穀、肥料、精米
26	八島要市商店	不明	米、雑穀
27	田中歯科医院	不明	歯科医院
28	荒田商店	不明	錻葉（ブリキ）細工
29	華光義貨出張事務所	堀口　計一	法学士、弁護士
30	不明	富金原　清三郎	陶器、鉱山諸用器、旅館
31	室田商店	不明	反物古着、紡績色糸類
32	不明	山本　友次郎	代書業（司法、行政）
33	不明	高橋　清之助	杞柳品製作・販売
34	岡自転車商店	不明	自転車
35	岡正蓮堂	不明	美術紙箱製造
36	不明	橋本　兵作	瓦の製造・販売
37	青木無尽堂	不明	饅頭、羊羹
38	石川時計商店	不明	時計、食料品
39	中村屋	不明	旅館、陶磁器商（有田焼）
40	不明	村尾　義一	薬、化粧品、食料品
41	翠松堂	岸本　廣介	書画、骨董、漆器、銅器、宇治茶
42	松場商店	不明	呉服、太物（綿、麻）
43	不明	大西　義一	和洋反物、雑貨
44	松尾玉泉堂	不明	茶
45	有隣堂	松尾　隣	薬、雑貨、計量器
46	吉岡自転車商店	不明	自転車
47	長尾商店	不明	各国漆器、銅器、茶器
48	不明	川上　竹吉	呉服反物
49	長尾亭	前川　隆吉	旅館
50	内田薬店	不明	薬、化粧品、食料品、雑貨、ビール、宇治茶、セメント

協賛欄より作成
1924年10月28日　発行

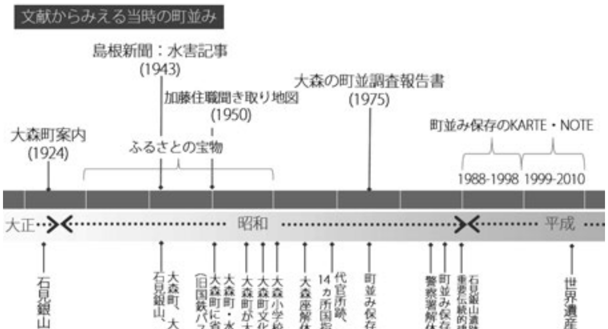

図 1　入手資料と町の出来事

（３）昭和中期以降の変化

昭和 50 年に発行された町並み調査報告書[7)]の調査範囲と本研究の悉皆調査で明らかにした現在の分布を比較した。比較範囲内で軒数には大きな変化は無かった。しかし、この範囲に限っても、40 年間で商店が約 10 軒減少していることが明らかになった（図２）。

図 2 報告書と悉皆調査の用途分布の比較

（４）昭和後期から平成

大田市の調査によると、大森町に現存する伝統的建造物の特徴は、特定物件 236 軒のうち約半分は明治期の形式を残し、その内、9 割以上が町家という構成になっている[8)]。武士、商人、職人が混在して暮らし、時代の流れに乗って形式が改変されてきた（図３）。これらの建物の改修の主体は「大田市の補助制度による改修」と「地区の会社等による公的補助金に一切頼らない自力改修」二種類に分類することが出来る。

３．建造物の現状

（１）建造物の特徴[8)]

大森町の伝統的建造物は、大きく町家と武家屋敷に分類できる。その他、裁判所・代官所などがある。

（ｉ）町家

町年寄や御用達、御宿を勤めた熊谷家を筆頭に裕福な町人層の大規模な町家から小規模の長屋まで町家によって大きな違いが見られる。

大規模な町家

間口 10 間以上、主屋は桟瓦葺平入だが、例外として青山家（御宿田儀屋：県指定史跡）のみ唯一妻入で建つ。外観は屋根に石州瓦を葺き、壁を漆喰で塗りこみ、正面側の開口　部を少なくすることで、防火に備えた意匠としている。町役人を勤め、御宿であった場合、建物を公私両用で使用されていたと考えられ、家構に影響を与えたと推測される。

一般的な町家

江戸末期は間口三～四間程度が多い。桟瓦葺の平入二階建、間取を幅一間の通り土間で、梁行に１列

並びの部屋がある。外観は大戸口の上手「見世」部分は蔀戸で、戸口は潜戸付吊り上げ戸を使用していた町家もある。寛政の大火の教訓と考えられているが、妻壁は大壁造であり、下市・宮の前では漆喰の袖壁の付く町家もある。

明治以降は身分制の崩壊により武家屋敷が町家に建て替わり、通りに面して主屋と土蔵が隣接して建てられた例もある。間取は梁行に２列の部屋になる場合のほか、小屋組を改造し、棟を後方へ移動させ、梁行方向へと拡張して居住面積の拡大と多室化を図った例も見られる。一方で間口二間半から三間程度の小規模なものにも一戸建があり、明治維新による社会構造、町の機能、住生活の変化などが個々の建物に反映されている。

大田市によって修理が行われた建物の大半が中・下層の町家で、平入切妻造で平屋あるいはツシ２階か本２階建の特徴を持つ。正面に関しては、吊り上げ式大戸や蔀戸は数件しかなく、雨戸・障子や入口部分の戸口障子に板戸というのが明治以降、大森における基本的なスタイルとされる。時代を追うごとに、平屋やツシ２階建から本２階建に移行していったと考えられているが、大森町においては江戸末期には本２階建の建造物が既に存在していたとされる。江戸末期以降、様々な家構が混在しながら町並みが形成された。

（ⅱ）武家屋敷

武家屋敷は身分階層によって違いが見られる。

上層の武家

広い敷地で通りに門がある。主屋を奥まった場所に配置し、表側に大戸口、式台と並び、座敷は敷地形状や広さによって通りに向く場合（西面あるいは東面）や南 面している場合とある。上手座敷には露地門が開く。主屋は桟瓦葺平入で４間取から６間取。残存している殆どが屋根裏を利用する「ツシ２階」を設ける。土蔵や 納屋などの附属屋は　主屋の背後に建てられている。別に２階建の隠居部屋を通りに面して建てる例もある。

（２）建造物の修景の現状

（ⅰ）建物悉皆調査

大森銀山重伝建地区においての修景の現状は1988～2010 年の 22 年間で 100 棟[9]、伝統的建造物 236 棟のうち、42%で行われた。これにより、大森町の空間的特徴である様々な時代と様式の建造物が混在したまま現在まで継承されている。大田市ではこの特性を活かす修景方針を計画し、魅力ある景観づくりに取り組んでいる。例として、教育委員会では「修理基準」を建立年代別、規模、部位別、町家・武家屋敷に分けて参考表を作成している[10]。一般的な手法と同じく、調査に基づく復原が基本になるが、不明な点に関しては参考表を用いて時代変遷に配慮した工法・材料・意匠に仕上げている。様々な身分の

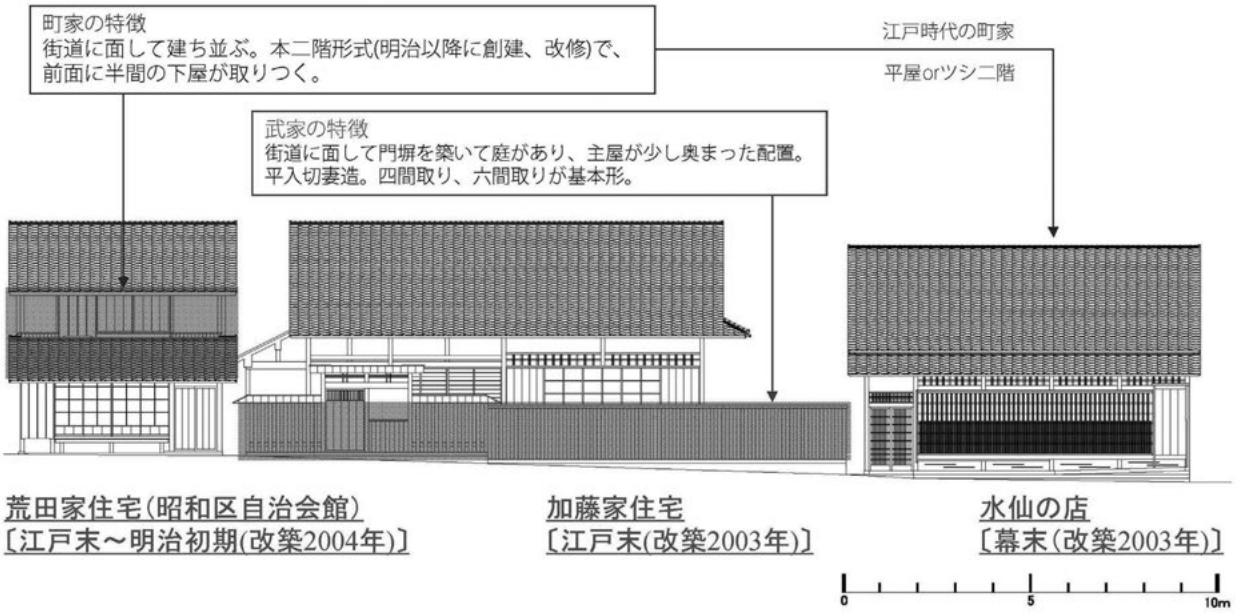

図 3　建造物の特徴（昭和区の一角）

人間が混在して暮らし、建物の履歴を大切にした修理を行うことを心掛けている。

今回の調査では地区ごとに、現状を把握した。

屋根形式と入口位置

全 287 棟の建造物を調査した結果、78%が切妻造で平入だった。増築によって複雑化したものがその他に含まれている（表３）。

表３　屋根形式と入口位置の関係

		切妻造	入母屋造	寄棟造	その他	総計
平入	棟数	225	8	3		236
	割合	78%	3%	1%		82%
妻入	棟数	28	7			35
	割合	10%	2%			12%
その他	棟数	10	1	2	3	16
	割合	3%	0%	1%	1%	6%
総計	棟数	263	16	5	3	287
	割合	92%	6%	2%	1%	100%

壁構造

観光客の目に一番触れることになる街道沿いの正面外観意匠は一階部分が 46%で真壁構造となっている。二階部分の壁は大壁構造が約 7 割を占めるが、上下階で構造年代が異なる建物もあった。隣接する建物との空間が狭い側面では 9 割が大壁構造を用いていた。これは、火災が類焼していくのを遅らせる為に大壁構造として木造の柱を隠していたことの名残であると考えられる。

壁の材料

伝統的建造物に用いられている材料は二つに大別される。焼色又は古色塗りを施した木板貼り、あるいはトタンなどの鉄板貼りである。トタンによって施工が成されている壁面については錆により崩れたもの、変色が目立つ建物も見受けられる。

用途

どの地区も住居の割合が一番多い。商店が最も多いのは「駒の足」の２０％で、次に多いのが「宮の前」「羅漢町」の１６％であった。空き家（もしくは物置として使用）は観光客が多い昭和区７％、新町８％、駒の足１０％と、地区による差は少ない。銀山地区には、住宅として使用することが出来ない放置された家屋もあった。

外観

現在残存する建物は､本二階建の建物が全体の 53%を占めており、昭和 50 年（1975）から変化していない。ツシ二階の町家は駒の足に１２％と最も多く、次いで宮の前８％､銀山７％となっている。これは、火災や水害などの被害を逃れた江戸時代の形式を留めた建物が駒の足に残り、地区の特性として継承されていることを表している。

屋根材

石見銀山で見られる瓦の色は大きく分けて３つになる。赤い釉薬瓦の石州瓦、河島家などで見られる燻瓦（渋い銀色の光沢ある色）、邇摩郡でも製造されていたとされる小鉄瓦（漆黒）である。大森町の景観を構成する上で重要な要素が赤色の石州瓦である。全体の七割近くが石州瓦で葺かれている。元大田市職員の W 氏の話によると、大森町内でも以前は窯を持ち、石州瓦を製作していたという。現在、修理などで用いられている新しい石州瓦は県内の瓦製造業者から入手しているが、古瓦と比較すると、やや色味が異なるという。今後は、古瓦の保存にも配慮する必要がある。また、トタンをはじめとした鉄板が各地区で散見される。銀山地区が 10%と最も多い。空き家となり損傷の激しいトタン屋根は大森町の景観の阻害要因になっている。

外壁

生活の変化や修理にともなう改変で、街道沿いと側面、そして上下階で使用されている材料が異なる建物があることが解った。

外壁に着目すると「下佐摩」家屋数は少ないが伝統的な壁が残存している。道路側の意匠は１階部分が板貼もしくは漆喰塗り仕上げで、２階部分を有している場合は土壁仕上げである。建物側面の土壁の養生として１階部分から２階まで、板貼を施しているが、１階部分の目立たない面を鉄板にしている物も見られる。

「宮の前」は代官所跡があり、古くから大森町の玄関としての役割を果たして来た。このため、漆喰塗りの壁の建物が他の地区に比べて多い。道路側を土壁仕上げ、一部漆喰塗りという外観の建物が多い。

「昭和区」は大森町郵便局やパン屋なども建っている観光客が多い地区である。外壁はモルタル吹付の近代的な建物が他の地区に比べてやや多い。

「新町」は他の地区と比較して面積は狭いが、伝統的建造物が多い。街道沿いのほとんどの建物が大田市の特定物件（伝建物）である。このため、道路側の建物外壁は上下階ともに半数以上が土壁仕上げに修景されている。漆喰仕上げの建物も全体の３割近くあり、修景が進んでいることがわかる。

「駒の足」は大森町で最も多くの伝統的建造物が修景されているエリアである。土産物屋やカフェ、商店など、伝統的建造物を活用して営業している店舗が多数存在する。街道側の建物は土壁と漆喰塗りで、側面は貼の土壁養生、土壁、漆喰で約８割が修景さ

れている。
「羅漢町」は観光客用の駐車場が近い。モルタル吹き付けと鉄板貼によって施工された在来構法の建物が他地域より多い。
「上佐摩下」は伝統的建造物が残存しているが、現代建築も多い。伝統的建造物修理は壁面を鉄板にしているものもある。
「銀山」は大森小学校や大森幼稚園、田畑の風景など、建物が少ない地区である。龍源寺間歩へのアクセス道となっている。伝統的建造物は点在するが空き家と思われる建物、モルタル吹付の現代住宅もある。

建具

１階部分の建具は外壁材の仕上げ方と同じく、修景が良く施されている「宮の前」「昭和区」「新町」「駒の足」までは、建具材まで木製で修景されている。町並み保全として、高い水準で細かな部分にまで修景がされている一方で、アルミサッシは羅漢町 45%、上佐摩下 75%、銀山 46%と他地区に比べて多く用いられていることが明らかになった。現代住宅だけではなく、伝統的建造物でアルミ材の建具に置き換わっているものは木製の建具に復原することにより、さらに町並み景観の向上が期待できる。二階の建具も同様の割合であり、窓のアルミサッシなどについては現代住宅においても、木桟の格子を付けるなどの最低限の景観配慮の他に何か工夫が必要である。

（ⅱ）各地区の修理の特徴と方向性

「下佐摩」「宮の前」「昭和区」「新町」「駒の足」は見学施設や土産物屋やカフェなど伝統的建造物を活用して営業している店舗が多数存在する。伝統的建造物が多く、修景が進んでいる。これらの地区では伝統的建造物も多いため、重伝建地区選定前に建築された近代的な住宅のあり方を検討する必要がある。

「羅漢町」「上佐摩下」「銀山」は在来構法の建物や空き家が見られる、伝統的建造物の意匠に復原するのは難しく、住民生活を壊さず町並み景観の連続性を遮らない修景の手法の検討が必要である。

（ⅲ）景観の保全度

これまで、分析してきた要素を基に外観意匠などの保全度を評価し、以下の４段階に分類した。

Ａ：伝統的な外観を完全に維持している伝統構法木造建築
　建具、外壁材などの一部が改造されているが、伝統的な外観を概ね保全している
　伝統構法木造建築

Ｂ：建具、外壁材などを大幅に改造しているものの、伝統的な外観形式は維持している
　伝統構法木造建築

Ｃ：昭和後期以降の現代の木造建築
　軽量鉄骨建築、鉄筋コンクリート造建築　他

その他：伝統的な外観を維持しているが、根本的な解体修理が必要と思われる損傷の激しい伝統的構法の木造建築

全体的を見ると保全度Ａの建物が現時点で69%と約７割の建造物が伝統的な外観であると評価できる。14%のＢの建物をＡにするための方策が必要である

表４　大森町建物保全度一覧表

		下佐摩	宮の前	昭和区	新町	駒の足	羅漢町	上佐摩下	銀山	総計
A	棟数	2	23	27	32	46	22	10	37	199
	割合	1%	8%	9%	11%	16%	8%	3%	13%	69%
B	棟数		5	11	1		6	9	8	40
	割合		2%	4%	0%		2%	3%	3%	14%
C	棟数		9	5	3	3	8	4	11	43
	割合		3%	2%	1%	1%	3%	1%	4%	15%
その他	棟数					1	2		2	5
	割合					0%	1%		1%	2%
総計	棟数	2	37	43	36	50	38	23	58	287
	割合	1%	13%	15%	13%	17%	13%	8%	20%	100%

（３）地域住民による修景の事例

大森には建造物の修理と活用を行っている会社が二つある。大森町に拠点を置く、義肢装具メーカーのＮ社とアパレルメーカーのＧ社である。いずれも大森町で起業し、修理した伝統的建造物を社員寮や商店、土産物屋などに活用している。

まず、N 社改修物件の資本内訳としては、現在、会社資本が 37 棟、個人資本で 11 棟の建造物を修理している。同じく G 社にも、活動と改修方針について聞き取り調査を行った。

Ｎ社とＧ社を比較すると、N 社の伝統的建造物の活用は水周りなど建物の利便性を高め、材料を交換しても居住性を向上させる方針である。これに対して G 社の修理事業の方針は文化財建造物修理の考え方に近く、当初の材料をできるだけ活用し商業利用のための空間のデザインを重視している。建物や地域における保存・再生の条件によって使い分けることが調和のとれた整備を成功させていると考えられる。

４．結論

大森町における景観保全は個々の建造物改修に大きな影響を受けている。伝統的建造物群の場合は内部改修の自由度が高い。所有者の用途や考え方に従って快適な空間に変化させることが可能である。

例えば外観の保全と内部の居住環境の改造の間にあるのが開口部の建具である[11)]。今回の調査で外観

が修景されていても建具がアルミサッシに置き換わっている建物が見られた。当初の形式を尊重するならば木製に修理する必要があるが、大田市のような降雪量の多い地帯では建具の気密性は日常生活に関わる。格子での目隠しや二重サッシなどの対策が考えられるが、他箇所の修理工事を含め、町の経てきた歴史と独特な生活様式について住民が文化的意識を持って景観保全に努めることと、空間活用のバランスを考慮して進められる必要がある。

また、民間主導による修理は大森町では社宅の居住者の増加など結果的に人口減少の歯止めとなっている。今後は、民間主導による修理への支援体制の強化と住民生活の利便性向上が景観保全を維持するために必要である。

参考文献

1) 銀と暮らしの博物館実行委員会：陣屋町大森 work book　2012
2) 大國晴夫：石見銀山歴史散歩　石見地域デザイン計画研究会（ILPG）　1992
3) 石見銀山資料館提供：諸用録
4) 川崎茂：日本の鉱山集落　大明堂 1973
5) 大森町役場：大森町案内　1924
6)K 住職作成・提供：大森町 1950 年頃の地図
7) 島根県大田市教育委員会：石見銀山御料　大森の町並調査報告書 19755)
8)島根県大田市教育委員会：町並み保存 NOTE(1988～1998) 1999
9) 島根県大田市教育委員会：町並み保存の KARTE(1988～1998),(1998～2010) 1999,2012
10) 大田市提供：「修景基準」年代別・部位別参考表
11) 奈良文化財研究所：木造建造物の保存修復のあり方と手法（提言）　2006